

## 家長から夫へ—川端康成『山の音』にみる過渡期の家族

小林美恵子

From patriarch to husband—Yasunari Kawabata's transitional family in

“Yama-No-Oto”

KOBAYASHI Mieko

Key Words: Patriarch, Husband, Family, Injured Soldier, War Widow

### 1. はじめに

川端康成『山の音』は1949(昭和24)年9月から1954(昭和29)年4月にかけて、断続的に発表された<sup>†1</sup>のち、長編小説として1954年に限定版(4月)・普及版(6月)が筑摩書房から単行本化され、『川端康成全集第8巻 千羽鶴・山の音』(新潮社、1969年8月)を最終決定版として今日に至っている。

山本健吉の解説<sup>†2</sup>において、これは「川端康成の傑作であるばかりでなく、戦後の日本文学の最高峰に位するものである」という最上級の賛辞が寄せられ、「舅と嫁とのあいだの自然に出てしまう親しさの感情、不倫な恋にまでは進まないそのデリケートな状態」こそが、この作品の主題であると位置づけられている。たしかに、古都鎌倉の中流家庭を舞台に、「日本の「家」を、そのあらゆるデテールにおいて、冷静に描き出し」ている『山の音』には、血縁の中に暗くうごめく愛憎が「日本古来の悲しみ」(川端)として描かれていることを感じることができる。

『山の音』論には、夢に視点を当てたもの、菊

子と信吾の関係を問うもの、信吾の老いや女性観を中心に論じるものなど多角的な研究史があるが、原善「血縁への夢—川端康成『山の音』論」<sup>†3</sup>の中の、『山の音』に定着している、『息子の放蕩で悩む父』というモチーフは、『父の異常に悩まされる息子』という具合に、裏返しにされて読むことが可能になる」という指摘には共感させられる部分が多い。信吾の、妻の亡姉の血脈に執着する思いと、血縁の子・孫への冷淡さというアンビバレンスは、間違いなく信吾という人間の理解しがたい一面を表している。

確かに信吾は、温厚で教養ある紳士とみえるが、老いを迎えた今、家庭の中には次々とほころびが現れてきている。死を意識するほど老いが迫ってきている自分が、どこまで子の結婚生活に責任が持てるものかと信吾は口にしてはいるが、長女房子の不幸は間違いなく信吾が招いたものとして描かれている。では、修一はどうか。原論では、保子の亡姉の血を受け継ぐ存在として重視されるべき修一の存在意義を忘れていたことが父としての信吾の欠陥として指摘されているが、ここではもう少し具体的に父子関係のひずみを考察してみたい。そこには、「心の負傷兵」としての修一のありようや、彼の浮気相手が戦争未亡人であることが大きく関わっていよう。修一の「心の負傷」には信吾が関わってはいないだろうか。

血縁で結ばれた子や孫が幸せになれていないことで自身の人生の結果を思い知らされる信吾の心境は、家制度下ならではの性質を持ち、家族世帯

\*教養科 Division of Liberal Arts

<sup>†1</sup>初出は1949(昭和24)年8月から1954(昭和29)年4月までの間に16編が各雑誌に分載され、その詳細については長谷川泉「千羽鶴子と「山の音」—「ほくろの手紙」「水月」に触れて—」(『川端康成論考』増補版、明治書院、1972年5月)等に記載がある。

<sup>†2</sup>「解説」(川端康成『山の音』新潮文庫、1957年4月)所収

<sup>†3</sup> 『日本近代文学』56号、1997年5月。

数より単身世帯数が上回ってしまった令和の今、理解の及ばないものになりつつあろう。執筆期間の昭和 20 年代後半は、家制度の解体期と重なっている<sup>†4</sup>が、この過渡期を「家長」として生きる信吾が見出したものは何であったのか、考えてみたい。

## 2. 尾形家の人々

尾形信吾は現在 62 歳、東京で会社を経営しているとみられ、息子の修一も同社に勤務、自分の妻保子や修一の妻菊子と四人で鎌倉に暮らしている。

作品内時間は執筆時間に重なる 1949(昭和 24)年以後の約 2 年間、まだ日本中が復興のさなかにある頃と思われるが、尾形家には一見戦争の痛手さえ見当たらず、豊かさや落ち着きに充たされているような印象を受ける。

信吾と保子はともに信州の出身、信吾は戦前に大学を出た高学歴者、保子は婿養子を迎えて家を継ぐ予定であったところを信吾に嫁ぐことになったという経緯があり、どちらも経済的に恵まれた家庭で育ったことが窺われる。夫婦には、ともに保子のたいへんに美しかった亡姉の記憶が残り、信吾には今もなお彼女への思慕の思いが消えていない。保子は姉が嫁いだ美男子の義兄に思いを寄せ、姉の死後、自分がその後には直りたいと願ったが、相手にされない憂き目を味わっていたところを信吾が引き受けて結婚した。信吾には、保子を通して自分の子や孫に、保子の姉の遺伝的要素が蘇ることを望む気持ちが今も拭い去れない。

信吾は保子との 30 年以上にわたる夫婦生活の中で、多少の婚外交渉を持った節はあるものの、おおむね円満な暮らしを維持してきたことは、保子のおっとりとした邪気のない気性からもうかがうことができ、無難に家を治めたことが確認できる。

しかしながら、彼の二人の子供、とりわけ修一の姉である房子には、愛情を身に受けて育った幸福感が乏しい。信吾は房子が生まれた時にはその「醜い」ことに落胆し、「(保子の)姉の血は妹を通じて生きてはこなかった。信吾は妻に秘密の失望を持った」というありさまであった。信吾は思慕を寄せていた妻の亡姉の血がわが子によって蘇ることを夢想していたわけで、心情としては共感できないでもないが、父親となった人間が持つべき感情ではないだろう。このような一面は、菊子に

見せる無限の優しさと比較するとき、信吾という人間の不気味な一面として受け取らざるを得ない。

父のこの感情が房子に伝わらないはずはなく、30 歳を過ぎた今もなお、彼女には「不器量で父に愛されなかった娘」という自覚が染みついている。不仲の夫・相原との結婚の失敗についても、「だらしない男のところへ嫁にやられた」「嫁にやる先がだらしないかどうか、よく調べてほしかった」と父を責め、当の相原からも「お父さんがお前を可愛がらなかったから、お前は性質が悪い」と侮蔑される始末である。房子は相原との間に二人の娘を設けているが、四つになる長女の里子は、信吾からも保子からもそろって疎ましがられるような、しんねりと陰湿な影を持つ子供として育ちつつある。これも房子に対する信吾の冷淡さが生んだ、副次的な結果と言わざるを得まい。

一方、修一は「男にしてはきれいすぎる二重目ぶた」を持つ美男子であり、保子の亡姉の血脈をどこかに探すならば、修一の身に引き継がれているとみるのが自然であろう。信吾が「修一ばかり可愛がっ」という保子の証言もあり、修一の成育過程に信吾が影を落とした形跡は探しにくい。

修一は過酷な戦場から生還した復員兵であるが、まだ 20 代後半の青年と思われる。二年ほど前、すなわち戦後 1、2 年ほどした後に、当時まだ 10 代後半であったと思われる菊子と結婚した。

菊子は八人きょうだいの、もう要らないはずの末っ子として生まれたという出自を持つが、「ほっそりと色白」「美しい」「可憐」などと表現されるように、容貌に恵まれたせいもあるろうか、家族に可愛がられて育ち、尾形家に嫁いで以後も、明るく思いやりある嫁として保子とも信吾とも、房子以上に円満な親子関係を築いている。信吾は明らかに保子の亡姉と菊子を同一視しており、菊子と信吾の仲はとりわけ親密で、菊子は修一以上に信吾との絆を深めている。

修一はフランス語を解するインテリでもあり、おそらく父と同様の高学歴を身につけさせてもらっており、姉の房子のように愛情の不足を信吾にぶつけるようなことはない。職場においては上司でもある父に対し、常に敬意を払ってはいるが、たとえば「お前、戦争で人を殺したか」という信吾の質問は、激戦地から生還した修一には父を遠い他者として認識させることになってはいないか。信吾は復員後の修一を人が変わったと感じているが、無数の殺人を強いられた修一には、戦争被害

<sup>†4</sup> 新民法施行は 1948 年 1 月 1 日。

が少なかつた古都で戦時下を過ごした父との間に大きな隔たりを感じずにはいられないだろう。戦争体験の有無は明らかに父と息子の上に溝を作ってしまった。現在の修一が、父である信吾に対し、何らかの疎遠な感情を抱いているのは、まずはここに原因があろう。そして、信吾の戦争理解の乏しさは、復員後の傷を癒すべきはずの修一の新婚生活にも影を落としたのではないだろうか。

明るく心優しい菊子は美しくもあり、愛される妻の資格は十分と思われるが、まだ新婚と言ってもいい時期に早くも他の修一の女遊びが始まった影には、相応の事情があるはずだ。長男が妻を独占しきれない、二世帯同居の〈家〉の仕組みも災いしたであろう。菊子は夫に馴染むよりも先に、まず父親に馴染んでしまっている。戦場で受けた心の傷がまだ癒えていない修一には、新たな家庭を築きながら回復していきたい希望もあったろうが、半身を信吾に預けたような姿勢の菊子に不満や物足りなさを感じていたとみることができる。

### 3. 「心の負傷兵」としての修一

修一はおそらく大正末期ごろの生まれと思われ、戦時下では大学を卒業していたかどうか、場合によっては学徒出陣で出征した一人であったかもしれない。父の信吾は1887(明治20)年前後の生まれと思われ、出征の経験は確認できない。父の会社に就職し、結婚後も実家で新婚生活をスタートさせているところを見ると、本来の修一には父に対する反発や葛藤はなかったといえよう。

一見したところ、円満この上ない尾形家に、まず生じる不協和音が、修一の浮気の問題である。彼は、会社においても信吾の秘書役のような英子とも関係があるように匂わされているが、結婚生活がまだ二年にも満たないうちに、菊子の「幼さ」を理由に絹子という女性に気を移し、絹子の家を訪ねては、同居人である池田という女性に対しても無礼で乱暴な振る舞いをするという。

強い愛情関係はなくとも妻との夫婦関係を平和に保ち、家の安泰をはかってきた信吾にとって、「情欲にも恋愛にも悩む風がな」く、異性関係も含めて遊び上手な若者に育った修一は理解の外にあり、その理由を「田舎出」の自分と都会育ちの息子の違いと推察している。信吾は修一と菊子の関係に観察の目を光らせ、「娼婦型」の女性に修一が感化されたために彼らの性生活も「急に進んで来た」のだとにらんでいる。が、これは一面的な

把握に過ぎまい。この段階で、信吾には息子の心に戦争の傷が深く残っていることは殆ど意識されていないといつてよい。

自分の部屋付きの事務員英子も修一の遊び相手の一人であると知った信吾は、英子から修一の本命の女性・絹子の存在を聞き出す。その結果、絹子は本郷で池田という「とてもきれい」で「感じのいい」女性と同居していること、その家で修一が酒を飲み、池田に無理に歌を歌わせて泣かせるなど狼藉を働くことなどを知らされる。絹子は20歳を少し過ぎた菊子よりは年上、池田は絹子より二つか三つ年上、英子は現在22歳、という描写があることから、修一を取り巻くこの4人の女性たちはほぼ同年代であることがわかる。英子は正月に尾形家を訪れ、菊子に対してすっかり好感を抱いた結果、絹子を訪れている時の修一の言葉を信吾に語って聞かせた。

「でも、はたの女にやかせないような女は男の方にも足りないんですの？」／信吾は苦笑した。／「奥さまのことを、子供だ、子供だって、よくおっしゃってましたわ。」／「君にか？」と信吾は声がとがった。／「はあ、私にも、絹子さんにも…。子供だから、おやじに気に入っていると、おっしゃってましたわ。」／「馬鹿な。」／(中略) 信吾は怒りにふるえて来そうだった。修一は菊子のからだのことを言っていたのだと、信吾は察した。

(「冬の桜」、傍線部引用者、以下同じ)

ここで信吾は、修一が菊子を子供扱いした理由が「からだのこと」に違いないと思ひ込み、それゆえに「怒りにふるえ」る思いをしたわけであり、またそのように読まれてきもきた部分である。が、修一が菊子を「子供だ」というとき、それは本当に「からだのこと」を指すのだろうか。

信吾に対し、修一の女性関係を明かしたことを気づまりに感じた英子は、自分が絹子に手を引くよう話すと約束して会社を辞め、絹子の勤める洋服店に職場を変えた。

以後も、彼女は菊子に深い同情を寄せ、絹子と修一が別れるために手を貸すようになり、それには池田も協力的であるが、絹子の思いも知る池田は、絹子を強く諫めることはできない。

ここで注目すべきは、絹子・池田・栄子の三人がみな、大切な男性を戦争で失った女性たちであ

るといふ点である。池田と絹子は戦争未亡人であり、二人は「未亡人の会」で知り合ったという。二人とも婚家は出て、自活の道を選んでいる。池田には男の子があり、婚家に置いてきたというが、取り上げられたという可能性も含まれるだろう。現在は自分の子と会えないつらさを紛らすように、小学生の家庭教師のような仕事に就いている。子供のいない絹子のほうは、ファッションの情報を得るためか、「アメリカの雑誌をどンドン読」み、フランス語も辞書を引けば「見当がつく」という。戦前の女子教育の中でもかなり高いレベルのものを身につけた女性であることが窺え、「娼婦型」とは程遠い人物像を描くことができる。

英子は、信吾の友人の娘の友人、という間接的な縁で信吾の会社に入ってきた女性で、当初信吾は彼女を軽く見ているところがあったが、英子もまた、恋人を戦争で失った「半未亡人」であった。「忘れられない人」がいてもおかしくはない、と保子に指摘されてようやく、信吾は英子にも痛ましい人生があったことに気づかされる。

池田によれば、酒に酔った絹子は修一に「私たちは夫が戦争に行っても、辛抱していたじゃないの？そして死なれた後の私たちはどうなの？修一さんは私のところへ来たって、死ぬ心配はないし、怪我もさせないで返すんじゃないの？」と泣いて語ったと言い、「帰って奥さんに、お前は戦争に行った夫を持った経験がないだろう、帰るに決まっている夫を待っているだけじゃないか、そうおっしゃい」と修一を煽り、修一も「よし、言ってみよう」と請け負ったというようなやり取りがあったという。

絹子の恨み節が、「奥さん」すなわち菊子に向けられるのは理不尽な気がするが、むろん菊子個人に妬みごとを言っているわけではなく、夫の貞操を云々する世の妻たちや、婚外交渉を問答無用に批判する社会への反発から発した言葉と受け止めるべきだろう。

戦時下の人口政策によって、「生めよ増やせよ」の掛け声の下、一時帰国兵士との結婚が奨励され、大陸の花嫁が送り込まれ、兵士の士気を削ぐとして夫戦士後の再婚も国の指導で望ましくないことと阻まれた。その結果、敗戦後の日本には戦争未亡人とその遺児が大量に残された。職業を得た絹子や池田たちは、経済的に大きく困窮しているわけではなさそうだが、愛情の上で夫を失った悲しみを癒すすべはなく、また生活上再婚しようと思

ったところで、適齢期の若者の大量戦死により、「トラックいっぱい女性に男性一人」と揶揄されるようなアンバランスが生じており、女性の結婚難は深刻であった。政府は教員や服飾技術の職業訓練を施すなどして自活の道を用意しようとしたが、敗戦後の混乱の中、十分な支援の手が回らないうち、人生設計を破壊された女性を無数に生んでいる<sup>†5</sup>。

修一と絹子の出会いの経緯は詳らかでないが、戦争で傷を負った者同士という共通点が引き合ったことは間違いないだろう。戦争の悲惨をもっとも直接的に身に受けた者同士、絹子には修一に夫を重ねる思いがあり、修一には戦死した者たちの無念を背負って一人の戦争未亡人に愛情を傾けたという関係が想像される。

このようにみれば、修一が菊子を「子供だ」と表現するのが、「からだのこと」を指しているわけではないことは明白ではないか。戦場でぎりぎり生き抜いた修一と、生き抜いて帰れなかった男性の妻である絹子という、命の極限ともいべき過酷を共有する二人から見れば、およそ戦争の被害とは無縁の場に位置する菊子は「子供」と思っても無理はない。

酒に酔ったこととはいえ、修一はさらに、絹子や池田に歌を歌うように強要し、二人に侮辱的な思いも味わせたという。

これは酒癖じゃなくて、戦地の癖じゃないかしらと思いつきましたの。戦地のどこかで、修一さんはこんな女遊びをなさったのじゃないかしら。そうしますと、修一さんの乱れた姿が、自分の戦死した夫が戦地で女遊びしている姿のように見えるんでございます。胸がきゅうとなって、頭がぼうっとして来て、なんですか、自分が夫の相手の女のような錯覚をおこして、下品な歌を歌って泣いてしまいました。（「朝の水」）

絹子や池田は、男たちの戦場を直接見てはいないわけだが、おそらく素面の時と泥酔した時の修一の落差の大きさに、このような想像をしたのであろう。夫の最期を知ることのできない未亡人の

<sup>†5</sup> 戦時下の人口増加政策については、拙著『昭和十年代の佐多稲子』（双文社出版、2005年3月）で詳しく論じた。

二人には、修一を手掛かりに必死に戦地の夫を知りたいと願う気持ちがある。このような修一のことを、池田は「心の負傷兵」であると表現し、信吾に対し「奥さまと二人きりでお暮しになれば、絹子さんとお別れになってゆくんじゃないか、私はそう思うこともございます」と提案する。

「心の負傷兵」である修一が、菊子と夫婦だけの所帯を持てば絹子との関係が終わるとは、どういことであろうか。少なくとも、菊子よりは修一の心の奥底を見てしまっている池田には、修一には献身的に彼だけの看護にあたる妻が必要だと感じてのことであろう。鎌倉での4人暮らし、出戻った房子まで入れれば7人の暮らしの中で、絹子が修一の傷を癒すのは難しく、それ以前に信吾と菊子の深い絆がそれを妨げる。このことが思い当たる信吾は、この提案に頷かざるを得なかった。

#### 4. 信吾という男

信吾の中に、かつて思慕を寄せた妻の亡姉の血脈に執着する思いと、自分の血族たる子や孫に対する冷淡とのアンビバレンスがあることはすでに述べた。かつて恋慕した妻の美しい姉、彼女が忘れられないがために妻も、娘も、孫も、「美しくない」という基準によって信吾から遠ざけられる。彼には基本的な人間性や家族愛は備わっているために、決定的なむごい振る舞いには出ないが、それだけに、最低限の責任は果たした善人の仮面のもと、決して一定の距離から内に彼女たちを入れることはない。その一方、美しい嫁の菊子にはこの姉を重ね、実の親子とも夫婦とも見紛うような惜しみない愛情を注ぎこむ。菊子を得たのが息子の修一であることから、かつて妻の亡姉の夫に抱いた妬心に似た思いを抱くに至り、「本来の《血》への夢を託すべき存在」としての修一を信吾は肯定できないでいる。

絹子と修一の関係が続く中で菊子は懐妊するが、「修一に女があるうちは、子供は産まない」と言って墮胎してしまう。その際、信吾はその赤ん坊こそが妻の亡姉の血を引いていたのではないかと、この観点から深い喪失感を抱く。一方では、相前後してこちらにも妊娠が発覚した絹子には、墮胎を強く願う。

作品内時間が昭和20年代であることを考えれば、婚外子を抱えた未亡人がどれだけ苦勞するかは自明のことであったために、信吾の非情さは前景化しないが、子供もないまま夫を失った未亡人

が、恋人との間に懐妊した子供を墮胎するとは考えにくい。孤独になった彼女たちの、唯一の家族である。

絹子の懐妊に関しては、修一の残酷さが一層露になる。彼は菊子の中絶費用を菊子には内緒で絹子に用立てさせる。さすがに息子の振る舞いの異常に気づいた信吾は「お前戦争で人を殺したかね」と尋ねるが、強制的に殺人を強いられる戦場に送られた息子に、問える質問ではないはずだ。

「さあ？僕の機関銃の玉に当たったら、死んだでしょう」という修一の答えは、息子の戦争体験になまじなヒューマニズムを込めて殺人の経験を確認しようとする父の言葉に反発したものに違いない。

修一は、どうしても生むという絹子を「なぐったり、踏んだり、蹴ったり、医者へ連れて行こうとして二階から引きずりおろし」したりしたという。信吾は絹子への思いやりから「不自然な子」を産むことを思いとどませようとするが、結果的に

絹子は修一の子ではないと言い張り、墮胎を拒否したため、小切手を渡して立ち去るよりほかはなかった。現実には、「自分が死んだ後にも、見知らぬ孫が生きる」ということに思い至らずにはいられない。信吾が妻の亡姉の血脈を追おうにも、すでにそれは信吾の手に負える範囲を超えてしまった。

電車の中で顔が酷似しながら赤の他人であったという親子ほどの男女に出くわした信吾は、二人がそれと気づかない親子ではないかという疑念が払しょくできず、一緒にいた修一にもそれが当てはまりかねないということを語って聞かせる。

「お父さんの言いたいのは、それだったんですか。僕はそんな感傷的な運命論者じゃありませんよ。敵の鉄砲玉が耳すれすれに、ぴゅんぴゅん鳴って通って、一つも当たらなかったんだ。中国や南方にだって、落とし子が生まれてるかもしれない。落とし子と会って、知らずに別れるくらい、耳のそばを通る鉄砲玉にくらべたら、なんでもありませんよ。命の危険はない。それに絹子は娘を産むとは限らないし、絹子が僕の子でもでないと言えば、僕はそうかと思うだけですよ。」（「秋の魚」）

信吾は反応していないが、この発言によれば、修一は「中国や南方」にも心当たりを残している

ことになる。信吾がいかにも保子の亡姉の血を継ぐ孫を探し求めようと、すでに叶わないことであり、いわば信吾の幻想としての願いは息子によって打ち砕かれた。

その一方で、これもまた同じころ、房子の夫の相原が麻薬の常習者となった挙句、女性と心中してしまう。相原が房子との不和のために他の女性と心中したなら、房子の親である信吾は遠回しに自分が殺したことになることと自覚し、また同様に修一との不和で菊子が中絶したなら、この赤ん坊を殺したのもまた、自分のせいと言えることに思いを致す。信吾は子供の結婚の不始末に親がどこまで責任を感じるべきなのかと嘆息するが、信吾を中心に広がる尾形家の人々の運命が悲惨なものとなった原因に、かつての恋への信吾の執着が災いしていることは間違いない。

## 5. 信吾の夫婦観

このように読んでみると、『山の音』は、長年、妻の亡姉への忘れがたい思慕に支配されて生きてきた男が、初老の歳を迎え、自分の生き方が子供の行く末を決定づけ、孫の代に至るまで自分の身に跳ね返ってくるという、厳しい現実と直面する姿を描いた小説であることがわかる。その一方で、自分の血脈をすみずみまで把握し、その行く末を案じたい気持があっても、そんなことは出来はしないという悲しさ、それと同時に人間の意図の及ばない、自然の摂理の大きさを賛美するようなおらかさまでを感じ取るのは行き過ぎであろうか。

信吾は、夫婦というものについて考えを巡らせる。もっとも強く信吾の意識に働きかけたのは、絹子の家から酒を飲んで帰ったと思われる修一が、真夜中に菊子の名を呼ぶ場面である。

「菊子う、菊子う。」／修一は手で門を叩くのではなく、よろよろと体を門にぶっつけているようだった。／(中略)修一はせつない愛情と悲哀とをこめて、菊子と呼んでいるようだ。身も世もあらぬ声のようだ。ひどい痛み「苦しみかの時、あるいは生命の危険におびえた時、朝ない声が母を呼びもとめるうめき声のようだ。／(中略)自分はあんなに絶望的な愛情をこめて、妻の名を呼んだことが、一度だってあったらどうか。外地の戦場にいた修一の、ある時のような絶望も、おそらく自分は知らずに来たのだから。(「夜の声」)

修一に女が出来たために、菊子と修一との夫婦関係は深くすすんだ。菊子が墮胎をした後で、二人の夫婦なかは温かくなごんだ。はげしい嵐の夜、菊子は常よりも濃く修一にあまえ、修一が泥酔して帰った夜、菊子は常よりもやさしく修一をゆるした。(中略)／修一は信吾の息子だけれども、菊子がこのようにしてまで修一と結ばれていなければならぬほど、二人は理想の夫婦、運命の夫婦なのか、信吾は疑い出すと限りがなかった。

(「傷の後」)

信吾は菊子に、修一とともに信吾夫婦と別居することを提案するが、菊子は同意しない。「修一がこわいんです」「あの人には、私にわからないところがありますわ。時々、不意にこわくなって、どうしようもありません」と心情を吐露する。

信吾が感じ取ったほど、菊子の方には修一と夫婦関係が成熟しているという自覚はないということだろう。

菊子にとって修一の「わからないところ」とは、彼の「心の負傷兵」の部分であろうか。絹子と別れた修一が、果たして菊子と結婚生活を維持できるのか、保証はない。が、菊子が保子や信吾との同居に頼って修一との夫婦関係を維持しようとすることには、もう限界がみえている。

作品の終盤、房子が小さい店を持たせてほしいと信吾に頼み、実現すれば菊子もそれを手伝いたいと言う。房子が商売に成功して、子供と共に新たな生活を確立出来たら、それは新しい時代に即した幸せを房子に提供することになるだろう。そのことは、過去の恋愛への執着とは無関係に信吾が房子にできる子への支援となる。菊子が房子を手伝うことは、修一と二人の生活を始める不安を和らげることにもなるのではないか。菊子を修一とともに別居させることは、妻の亡姉を重ねる信吾の視線から菊子を解放することになり、結婚後初めて菊子は自由な立場で修一と生きていくことになる。房子も、父への様々な思いから解放され、信吾の執着から無縁の位置で自分の生活を模索することになるだろう。

絹子の子供、修一が戦地に残したかもしれない子供、それらの中に亡姉の血脈を探したくとも、なす術はない。信吾はここに至って、ようやく長い間の若き日の恋への執着から解放されたのでは

ないか。二世、三世にわたって血脈を追ったところで、「自分が死んだ後にも見知らぬ孫が生き」ていく。

作品は、信吾が家族で信州のもみじを見に行こうと提案するところで幕を下ろす。この終わり方を、山本健吉は「故郷の紅葉のもとに、菊子を立たせてみたい」からであるとする<sup>†6</sup>。が、この提案は、菊子を通しての「保子の姉への恋心の復活」ではないだろう。保子の姉と菊子を重ねる思いはあるとしても、それは身代わりとしてではなく、むしろ保子の姉とは別人格としての菊子を確認するためではないか。

信吾は、老いを感じる日常の中で、「子供がうまくいっていると自分の成功になるのか」「子の結婚生活に、親がどれほど責任を持てるのか」といった疑問に頭を悩ませる。子が独立したら親とは関係ないのだ、と言いたい気持が言外に感じられるが、房子の失敗も、修一の失敗も、自分の子育ての段階での失敗に端を発していると思えば、自身の責任を認めざるを得ない。信吾の場合は、保子の姉への執着が親としての信吾を誤らせたと言えるだろう。池田や英子が言ったように、菊子は修一と二人きりで完全に向き合う生活をしなければ、修一と本当の夫婦になれないようにも思われるが、そのように個別の行き詰まるような向き合い方がなくても、ともあれ夫婦としての時間が継続されるのが〈家〉というものだろう。が、戦後の法律は親子よりも夫婦を単位にすることに改まった。

菊子も、信吾に寄り添いつつ、斜めに修一と関わるような関係をいつまでも続けられるものではない。「心の負傷兵」である修一に治療が施せるのは菊子しかいない。そのことを深く自覚しているのは信吾であろう。

## 6. おわりに

夫婦というものは、お互いの悪行を果てしなく吸い込んでしまう、不気味な沼のようでもある。絹子の修一に対する愛や、信吾の菊子に対する愛なども、やがては修一と菊子との夫婦の沼に吸い込まれて、跡形も留めぬだろう。戦後の法律が、親子より夫婦を単位にすることに改まったのはもともと信吾は

思った。(「夜の声」)

ここには、各世代の夫婦が寄り集まって家として暮らしていても、人の生きる単位としては、一対の夫婦が基本なのだという、信吾が最後にたどり着いた境地が読み取れる。現代には通じにくい感慨だが、夫婦として生きる場には、この「沼」が生じるであろうし、生じないようであれば夫婦としての同伴はできないに違いない。これこそが、戦前を家長として生きた信吾が、家族形態の転換期に行き着いた結論だろう。息子とうまくいかないうちからといくら愛情を傾けても、菊子の幸せは信吾には用意できない。まして失った恋の名残に執着し、菊子に思いを寄せることは、菊子と修一をいっそう遠ざけ、どちらをも不幸にするだけである。

修一と信吾の父子関係に注目して『山の音』を読んできた。妻の亡姉への執着、ひいては菊子への執着が、「心の負傷兵」たる息子の回復を妨げ、そのことが息子の浮気を誘引し、菊子の墮胎にもつながった。信州に向かった信吾は、保子の亡姉の名残をとどめる信州の家の凋落を確認し、見事なもみじの前に菊子を立たせることだろう。

秋の信州を背景に、信吾はそこで初めて、誰かの血脈としてではない菊子を確認し、ようやくこの執着心を断つことができるのではないか。それは菊子を息子の妻という立場に立たせてやることであり、そこから先の血脈に無用の期待や心配をすることの徒労から信吾をも解放することを意味しよう。『山の音』は、このように、家長という存在が、「家」という単位で生きることの限界に向き合い、次世代を夫婦という個別単位に解放するということの「自然」に気づかされていく物語であったといえることができるだろう。

## 参考文献

- [1]長谷川泉『川端康成論考』(明治書院、1965年6月)
- [2]『現代日本文学館 24 川端康成』(文藝春秋、1966年7月)
- [3]『現代のエスプリ』第35号「川端康成」(至文堂、1969年1月)
- [4]『新潮臨時増刊 川端康成読本』(1972年6月)
- [5]『日本文学研究資料叢書 川端康成』(有精堂、

†6 †2に同じ。

- 1973年2月)
- [6] 山田吉郎『『山の音』における夢』（『日本文芸論稿』10号、1980年6月）
- [7] 『国文学解釈と鑑賞』第46巻4号「性表現とエロティシズム 第二特集川端康成没後10年」（至文堂、1981年4月）
- [8] 辻本千鶴『『山の音』論—その「愛」の様相』（『論究日本文学』第50号、1987年5月）
- [9] 今村潤子「川端康成『山の音』の女性」（『近代文学論集』第15号、1989年11月）
- [10] 『国文学解釈と鑑賞』第56巻9号「川端康成の世界」（至文堂、1991年9月）
- [11] 原善「血縁への夢—川端康成『山の音』論—」（『日本近代文学』1997年5月）
- [12] 渥美秀夫『『山の音』論—修一という息子』（『愛媛国文と教育』30号、1997年12月）
- [13] 渥美秀夫『『山の音』考—房子という娘』（『愛媛国文研究』47号、1997年12月）
- [14] 『国文学解釈と鑑賞』第62巻4号「川端康成特集」（至文堂、1997年4月）
- [15] 石川巧「特集・脇役たちの日本近代文学 房子—川端康成「山の音」」（『叙説Ⅱ』5号、2003年1月）
- [16] 小谷野敦『川端康成伝 双面の人』（中央公論新社、2013年5月）

※ 本文からの引用は、『川端康成全集第八巻 千羽鶴 山の音』（新潮社、1969年8月）による。仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。